

【第146話】ロリだったころのお話

その子供はベビードールを身に着けてベッドに座っていた。硝子玉のような何も映していない目がとても印象的だった。子供がいる部屋の壁は分厚い硝子で出来ていて、まるで水槽のようにも思えた。子供部屋というには硝子ケースの中は整いすぎていた。

天蓋付きのベッド、三面鏡を備えたドレッサー、背の低いアンティークの衣装ケース、床に敷き詰められた毛足の長い深い紅色の絨毯、それら全てが子供の部屋には相応しくないように思えた。

ベビードールを身にまとった子供の髪は長く、艶やかだ。恐らく手入れが行き届いているのだろう。爪先まで綺麗なことが硝子越しでもはっきりと判る。だが子供は硝子の壁の外には興味がないのか、ぼんやりとした表情を浮かべているだけで身動きひとつしない。

透明な壁に設えられた金属製のドアだけが浮いて見える。白衣を翻し、男が進んでドアを開ける。男が呼びかけると子供がのろのろと動いて振り返る。いつものように、と言われた子供が頷いてベッドを降り、衣装ケースに向かう。

子供がベビードールを脱いで服を着替える。薄く艶やかな生地で作られたキャミソールは裾のところにレースがあしらわれていた。慣れているのだろう。子供は難なくキャミソールを着て、長い髪を背に払った。

次に子供が向かったのはドレッサーだった。スツールに腰掛けた子供が三面鏡を開いて引き出しを開ける。鏡を覗き込んだ子供が唇に触れ、次に頬を確かめるように触ったかと思うと、次々に引き出しを開いていく。ドレッサーの引き出しには化粧品が揃えられていて、子供は誰に指示されるでもなく、その中から使うものを選び取っていく。

躰は殆ど終わっているのだ、と男が言う。男が言った躰という言葉の意味は、恐らく調教ということだろう。子供は男が話していることには興味を示さず、淡々と口紅を刷き、リップグロスを唇に乗せる。リップグロスが薄くのばされると、子供の唇は幼いながらも艶っぽさを帯びた。

髪を丁寧に梳く間も、子供の目は何の感情も示していなかった。鏡を見ているのははっきりしているのに、まるで人形のようにも思える。ただ指示された通りに動き、身支度を調える。そんな印象だった。

確かめるように鏡を覗いた子供が、引き出しを閉め、三面鏡を畳んで立ち上がる。男の前に歩んできた子供が、腕を伸ばす。細い腕と美しく艶やかな子供の表情がアンバランスで、作り物のように思える。

男が子供を抱えてベッドに歩み寄る。そっとベッドに下ろされた子供の傍に男が腰掛ける。子供はまるでそれが決められたことのように、男の股間を探り、ペニスを引っ張り出すとためらいもない様子で舐り始めた。屈んだ子供の尻を男が撫で回す。するとそれまで感情のなかった子供の目が、艶を帯び、吐息が荒くなる。

男が白衣のポケットから針のない注射器とアンプルを取

り出す。その気配を感じたのか、子供がペニスを舐め回しながらショーツをずらす。それを待っていたのか、男はアンプルの中身を吸い上げた注射器を子供の尻に突き立てた。

それまで一声も発していなかった子供が甘えた声を漏らし始める。肛門に突き刺さった注射器のピストンが押され、中身が注がれることで感じているらしい。甘ったるい声で喘ぎながら、子供が熱心に男のペニスを舌を這わせる。男のペニスが勃起すると、子供は小さな口を開けて先端部分を咥えこんだ。

男が微笑みを浮かべて子供の耳許に囁きかける。いい子だね、と誉められて嬉しかったのか、子供が目を細めて尻を突き出す。すると男は空になった注射器を放り捨て、今度は指で子供の肛門を弄り始めた。するとペニスを咥えていた子供が細い身体を震わせ、片手を自分の股間にやる。だが子供がショーツの中に手を入れる前に、男が子供の両手をつかんで引き起こしてしまう。

軽々と手首をつかまれ、身体を起こされた子供が力なく首を振る。赤く熟れた色の乗った唇を震わせて子供がせがむと、男が頷いて子供のショーツを剥ぎ取る。露わになった子供の股間は幼い少女そのもので、アンダーヘアのない恥丘の下には小さな割れ目があった。そこに男が手を這わせると子供がびくんと身を震わせる。

股間を弄られていくのは駄目だと男が言うと、子供が目には涙を浮かべて何度も頷く。男が手を離すと、子供は足を開いてぺたんと座り、男に見せるように幼い女性器に手をあてがった。男がその股間を覗き込んで検分する間、子供

は潤んだ目で男を見つめ、艶やかな唇を小さな舌で舐めた。昂奮しているためか、子供の頬はほんのりと赤く染まっている。

検分し終わった男が顔を上げる。子供が潤んだ目で男を見上げると、漸く男がベッドに乗って子供の唇を奪う。待っていたのか、子供が夢中で男と舌を絡め、唾液を啜る。

ベッドにうつ伏せに倒された子供が膝を立てて尻を上げ、か細い声でねだる。男が楽しげに笑って子供に話しかける。

「これが欲しいの？」

そう言った男が子供の女性器ではなく、肛門に指を突き立てる。その瞬間、子供は仰け反って腰を震わせた。

「んう……」

甘えた声を漏らした子供の顔はすっかり蕩けている。与えられる刺激を性的な快楽として感じている証拠だ。息を荒げて子供が腰をくねらせる。が、男はわざと焦らすためか、子供の肛門に指をゆっくりと出し入れする。

「ああ……」

シーツをぎゅっと握り、懸命に何かを堪えるような声を漏らして子供がしきりに腰を振る。そのたびに男が子供の肛門に突き刺した指を動かす。男が子供の性感をじわじわと引き出しているのだ。

子供の声がどんどん甘ったるく、激しいものへと変化する

る。キャミソールが背中を滑り、露わになった胸を男が弄ると、子供は敏感に反応した。喘ぎ声を漏らしながら開いた口の端から涎を垂らし、細い身体を何度も震わせる。

「いっちゃったの？ 早いね」

くすりと笑った男が子供の尻に突き刺していた指を抜く。くたりと脱力した子供の腰をつかんだ男が、今度は指ではなくペニスを子供の尻に一気に突き立てる。するとそれまでベッドに伏していた子供がびくんと震えて仰け反る。

「ちゃんと感じてるね。うん、いい子」

子供の耳許にそう囁きながら、男が腰を揺すり始める。それと同時に男は子供の股間を弄り始めた。細い身体をくねらせて子供がシーツをつかみ、快楽に顔を緩めて喘ぐ。

「……せんせえ」

掠れた声で喘いだ子供が蕩けそうな顔になる。誉められたことが嬉しいのか、それとも強い快楽に溺れているのかははっきりしない。が、男はなおも子供の身体を弄り続けた。美しく、それでいて愛らしい顔立ちの子供が快楽に蕩けるような表情を浮かべ、荒い呼吸の合間に甘えた声で鳴く。

「そう、ここもちゃんと……出来る？」

男が片手で子供の胸も一緒に弄ると、子供が何度も頷いてみせる。男に犯されてはいるものの、求める快感が得られないもどかしさがあるのだろう。子供が涙を流して男を肩越しに見返り、しきりにねだる。だが男は子供の耳許に

顔を寄せて囁く。

「だ一め。ちゃんと出来てから」

子供が半ば苦しむような表情を浮かべて息を荒げ、シーツをつかんで唇を噛む。すると元々細かった子供のウエストが、ほんの少し細くなる。それに反するかのように子供の股間からは割れ目が消え、小さなペニスが現れた。

「あっ……」

吐息と共に子供が甘い声を上げる。男が現れた小さなペニスを弄り始めたからだろう。子供の呼吸がより乱れて、甘えた声が混ざり始める。だが男はすぐに子供のペニスから手を離してしまった。

「ここは手じゃなくて、玩具だったでしょ？」

そう言った男がポケットから取り出したのは、オナホールと呼ばれる大人の玩具だった。子供のサイズに合わせてあるのだろう。小さなそれを見た子供の目は明らかに昂奮している。子供は手渡されたオナホールを自分の股間に寄せ、小さなペニスを入れて動かし始めた。

「きもち、いいかも」

「いいかも、じゃなくて、気持ちよくなるようにしなきゃ」

小声で呟いた子供に囁きかけた男がゆっくりと抽送を始める。子供はそれに合わせるように手を動かし、小さなペニスをオナホールで扱き始めた。最初はぎこちなかった子供の手の動きが次第に滑らかになり、ベッドに頭を預けて快樂に溺れた表情で男を呼ぶ。オナホールには潤滑液が仕

込まれていたのだろう。子供が手を揺するたびにぐちゅぐちゅという音が鳴る。

「もう少し、ほら。奥まで突っ込んで。壊していいから」

男がそっと子供の耳許に囁き、子供の握るオナホールをつかんで強く揺すり始める。するとそれまで恍惚の表情で涎を垂らし、荒い息を吐いていた子供が悲鳴のような声を上げて仰け反る。

「ひゃあ！」

「もっと擦って。壊してもいいし、破ってもいいから、ちゃんと感じないと」

声を上げた子供を急かすように男が言って、オナホールを握って小刻みに揺する。それまで自分のペースで自慰をしていた子供は、急に与えられた激しい刺激に驚いたのだろう。目を見張って尻を突き上げ、オナホールから手を離してシーツをつかみ寄せる。男のペニスを肛門に突き入れられていることすら、子供は忘れているのかも知れない。

オナホールでペニスを扱かれ続けた子供が甘ったるい声を上げて悶えるまでには、それほど時間はかからなかった。その頃には子供は男のペニスにも同時に感じるようになっていた。

「ほら、そろそろ出すよ。いって」

男に囁きかけられた子供がこくんと頷いて腰を揺すり、男が支えているオナホールでペニスを扱う。

「あああっ……」

か細い声を上げた子供がオナホールにペニスを根元まで突っ込んで背を反らす。その顔は快楽に囚われ、蕩けきっていた。身体を震わせた子供が射精したのだろう。男がつかんだオナホールから白い液体が漏れてくる。

「はい。良く出来ました。次は本物にしよう」

そう言って男が視線を向ける。それまで傍観者に徹していた彼女は頷いてベッドに上がった。

「本物じゃないわ。わたくしは人形。そうでしょう？」

「本物の、人形って意味」

男がそう言って笑う。初めての射精だったのか、子供は脱力している。そんな子供のペニスからオナホールを外した男がベッドに腰掛ける。引っ張られる格好になった子供が男の足を跨いだ状態で足を開く。

「綺麗にしてあげて」

男に言われるままに彼女は子供の股間に残った精液を舐め取った。すると子供のペニスがすぐに勃起する。

「元気なのね」

くすりと笑って彼女は小さなペニスに舌を這わせた。舐められるのが初めてだからなのか、子供は頬を赤くして息を荒げ、今にも射精しそうなほどに勃起している。

「機械の人形が大好きだから」

言い聞かせるように子供の耳許に囁いた男がキャミソールの中に手を入れる。胸を弄られ、ペニスを舐められたためか、子供が腰を震わせて切羽詰まったような声を漏らす。

「まだ、出さないで。お人形のおくちにぱっくんしてもらってからね」

楽しげに笑った男に促されるままに、彼女は子供のペニスを口に入れた。小さいながらもぱんぱんに張り詰めたペニスを舌先で刺激すると、子供が仰け反って甘えた声を上げて射精する。彼女は人工クリトリスを操作し、口に入ってきた子供の精液を処理した。

「次はさっきの玩具みたいな機械の膣に入れて」

二度連続で射精したにも関わらず、子供のペニスはすぐに勃起する。恐らく男が子供を抱え込んだままだからだろう。だが子供は完全に快楽に囚われているのか、男が言うことに素直に頷くだけだ。

彼女は指示された通りにベッドに横たわった。男が抱えていた腕を解くと、子供が覆い被さってくる。

「まずは胸ね」

そう言って男が子供の手を取り、彼女の胸を服の上から触らせる。男にされるがままに子供が彼女の胸を弄り、人工乳首に触れる。

「かちかちいうよ？」

子供がそう言いつつも嬉しそうに彼女の乳首を弄り回

す。その頃には彼女の方も性感を刺激されていた。人工乳首を弄られれば感じてしまうのは当たり前だ。それにこの状況は彼女にとって初めてで、刺激的で、だからこそ昂奮する。男に誘導されているとはいっても、子供は機械仕掛けの身体を嫌がりもせずに、むしろ積極的に触れてくる。

「わたくしは機械仕掛けのお人形だから、乳首も機械なの」

そう言って彼女が微笑むと、最初に見た時は硝子玉のようだった子供の目に感情が宿った気がした。きかい、と呟いて子供が彼女の胸を小さな手で弄り、乳首を指先で何度も押し込む。そうしているうちに子供が困ったような顔になった。

「見たいの？」

男に耳打ちされた子供が赤くなりながらも頷く。彼女は男に言われる前に自分から服を緩めてみせた。すると子供が彼女の服の内側に手を入れて、今度は直接、人工乳首を弄る。

「暴発する前にいれさせてあげてくれる？」

苦笑を浮かべた男に促され、彼女はスカートをたくし上げてショーツをずらした。すると男が子供の腰をつかみ、勃起したペニスを彼女の人工膣に突っ込む。

「く……んっ！」

オナホールに挿入した時とは違うのか、子供が身震いして甘い声を漏らす。彼女は子供に合わせたサイズの人工膣にペニスが入ってくる感覚に声を上げた。

「あああっ！」

火傷する、と錯覚するほどの快感信号が人工膣から機体内を駆け巡るような感覚に囚われる。彼女が操作するまでもなく、人工膣は挿入されたペニスを刺激し始めた。ペニスを人工膣で擦られたからか、子供が声にならない声を上げて悶える。そんな子供に男が囁きかける。

「気持ちいいでしょ？ 機械仕掛けのお人形って。さっきのスイッチみたいなのを舐めてあげて」

そう言いながら男が子供の背を押す。彼女に覆い被さる格好になった子供が問いかける。

「すいっち？」

「ああっ！ ここ……よ、かちかちいった……あはっ！」

彼女が服のはだけた胸を手でなぞると、子供が頷いて人工乳首に舌を這わせる。そんな子供の手を男が握り、舐めていない方の人工乳首を弄らせる。

「はい。手はこっちのスイッチを弄って。かちかちいうでしょ？」

男が促すと子供が言われるままに舐めていない方の人工乳首を指で弄くる。無意識なのか、それとも男に押されたのかは判らないが、子供は彼女の人工乳首を弄くりながら腰を押し出してきた。小さいながらも張り詰めたペニスが人工膣に深く突き刺さり、それと同時に人工クリトリスが押される格好になる。

「あっ！ あっ！ あああっ！」

人工クリトリスを押し込まれた途端に激しい快感に襲われ、彼女は声を上げて仰け反った。そんな彼女の人工乳首を舐りながら、子供がふわりと微笑む。

「ぶるぶるして……きもちいい……」

性器が男性のものに変化しても、子供は少女のように愛らしく笑う。そのことを彼女はとても嬉しく思った。機械仕掛けの膣に慣れていないためか、子供が小さな声を漏らして射精する。だが精液を吐き出したペニスが萎えることはなく、むしろさっきより一回り太く勃起し、人工膣を押し広げてくる。

「そうそう。もっと好きに弄っていいよ。機械の人形は壊れたら直せば元通りだから」

男が子供が射精した直後に耳許に囁きかける。ある種の呪詛のように聞こえるそれは、子供にとっては快感になっているようだ。子供は射精したばかりなのに息を荒げて彼女の人工乳首にしゃぶりついた。

最初はためらいがちに触っていた子供の手が、人工乳首をつまんで引っ張ったり、押し込んだりし始める。かと思うと、もう片方の人工乳首を舐めるだけでなく、吸ったり噛んだりしてくる。

「もっと、引っ張ってもいいの……よ！」

彼女は快感に喘ぎながら子供を見つめた。今日は人工乳首などの部品は、子供の力でも易々と壊せるように脆いも

のに換装してあるのだ。

彼女が言うままに子供が人工乳首に噛みついたまま、顔を上げる。その拍子に片方の人工乳首の根元が折れて外れてしまう。

「あああっ！」

衝撃に近い快感を得て彼女は声を上げて仰け反った。歯の間に挟まった人工乳首の破片を指でつまんだ子供がとろんとした顔で訊ねてくる。

「……んっ！ 取れちゃった！？ いたかった？ だいじょうぶ？」

「いいのよ！ もっと壊して……あっ！」

痺れるような快感が走り、彼女は思わず仰け反った。子供が手で弄っていた方の人工乳首に指をかけ、少しずつ力を込めているのだ。

「どう？ 壊すと気持ちいいでしょ？」

子供に囁きかけた男は薄く笑っている。子供は淡い笑みを浮かべて頷いてから、甘ったるい声を漏らして指に力をこめて人工乳首を折った。それと同時にまた射精する。

「んっ……。でも、お人形さん、かわいそう」

射精しても快感の余韻があるのか、蕩けるような面持ちで子供が言う。子供は人工乳首の破片と穴の空いた彼女の人工乳房を見ていた。そんな子供の耳許に男が囁きかける。

「大丈夫。機械のお人形はね。壊れても気持ちいいだけだから」

子供に人形と言われたことに彼女はぞくりとしたものを感じた。そんな彼女をどう思ったのか、子供の耳許に囁きかけた男が意味ありげに笑っている。

「きもちいいの？」

「んっ！　とっても、きもちいいっ！　きゃふっ！」

彼女は子供に答えながら、快感にどっぷりと浸かっていた。子供は彼女のような機械仕掛けの人形に触るのは初めてのはずだ。なのにためらいなく人工乳首を壊し、しかもそのことに罪悪感や嫌悪感は抱いていないようだ。

「ほら、もっと壊さないと」

男に囁かれた子供が頷き、人工乳首がなくなって穴が開いた人工乳房にしゃぶりついた。人工乳首がついていたところを舐める子供の唾液が機体内部に入ってくる。機体内を伝った唾液がコードにまとわりつき、垂れて落ちる。かと思うともう片方の穴には子供が指を突っ込んで押し広げる。

彼女を壊すことと、ペニスに刺激を受けて射精することに子供は夢中になっていた。いつの間にか自分から腰を動かして人工膣にペニスを出し入れしている。彼女は子供から与えられる強い刺激で強烈な快感を得ていた。

「……んっ！　ぶいんぶいんって……すごい！　あんっ！」

甲高い声で喘いだ子供が淫らに腰を振り、人工膣内で再

び射精する。彼女は子供の言葉に羞恥心を刺激されて頬を染めた。まさか子供の言動に翻弄されるとは思っていなかった。だが今の彼女は壊される快感と、恥ずかしいという羞恥心を刺激されるという快感の両方を得ていた。

子供が慣れてくる頃には、彼女は人工乳首だけでなく、人工クリトリスや人工膣まで壊れていた。今日はここまで、と男が止めなければ、子供はいつまでも彼女を壊すことに執心していただろう。

事が済んだ後、子供は男が言うままにキャミソールを脱いだ。その股間からは再びペニスが消えていた。一人で身支度を調えた時とは違い、ぼんやりとベッドに座る子供の世話を焼くのは彼女の役目になった。化粧を落とし、シャワーを浴びさせ、下着とベビードールを着せると、子供はまるでスイッチが切れたように眠りについてしまった。

天蓋付きのベッドで眠る子供は、硝子ケースに収められた人形のような。壁越しに子供を見ながら彼女はそんなことを思った。

～立ち読み版はここまでです～